

私は主としてセメント工場作業であった。百二十余人の作業隊長として各部面で下手なロシア語で監督と交渉したが作業が進まず、部品がなかつたり、設計圖どおり組み立ててないと叱られたり、頭を悩ますことがたびたびであった。我が隊員には技術専門家がいたので、彼らを信頼し励まし合つて難工事を切り抜けることができた。

石炭を粉末にして噴射点火の調子もよく、石灰岩を牛乳状になるまで砕いたりませたりする工程も調子よく、いよいよ傾斜した直径二・五メートル、長さ三十メートルの鉄筒（中にらせん状のみぞ）の中に、筒の上部から石灰岩（乳状）を流し下部から石灰（粉末）を噴射点火すれば、静かに回転する鉄筒の中に焼けた石灰岩が豆つぶほどになって流れ出る。一同これを見て歓喜の声を上げた。これから種々の工程を経てセメントになる。わが隊員はセメントを手に乗せ、苦しかつた二年余の作業をしのび、むせび泣きをした。

共産主義教育のオルグには要領よくわかつたふりをして、作業に精を出した。

第二次帰還者が発表され、私もその中であつた。死んだ戦友と残つた人にお先に済まないという気持ちで涙ながら帰つた。

ナホトカでは身体検査、思想調べがあり、残留した者もあつた。緑の祖国日本が見えたとき、とめどなく出る涙を抑えられなかつた。

ソ連抑留体験記

静岡県 林 順 一

悲しい思い出

負けを知らなかつたこの国にも敗戦という悪魔が迫つてきたのが昭和二十年八月十五日である。これを知つたときは、私たちの目の前が真つ暗くなつてしまつた。

この日から何が何だか理解できないうちに我が独立第十五飛行団司令部の者は鞍山神社に集結した。司令部以下各隊の将兵の中には、周囲の山岳地帯に逃れて立

てこもつたり満州人部落に身を隠す者も多かつたようだが、ソ連軍の襲撃を受けて死亡した者もあり、捕らえられた者は私たち同様に抑留されたものと思う。逃げて逃げて内地にたどり着いた者はほんの少数だと聞いている。

そして十月の末にソ連軍の命令で荷車に詰め込まれ、行方知れぬ旅立ちとなつてしまつたのであるが、それまでの間にソ連は鞍山製鋼所の解体や各部隊の備品等をすべて搬出し、また満州各駅等に野積みにされていた大量の穀物を一粒残らずなめたように運び去つてしまつたのである。この様子を見て満州人は「ターピース（ソ連人のこと）が来たら雀が泣いている」と言つたが、雀に託して悲しい気持ちを表現したかつたのだと思う。笑いごとではなく深刻な事実である。

その後また満州人が「お願いするからもう一度必ず来てください」と私たちに言われた言葉が、今も頭の中に残っている。

また、次々に南下してくる無蓋車は北滿よりの引揚者でほとんどが婦女子であつた。軍服等を着て頭は丸

坊主である。持ち物は途中で取り上げられたといつて何一つ持っていない。私はポケットから水砂糖を出して渡した。少しでも口を潤してほしかつたのである。中にはやせ細つた生まれて間もない赤子をしつかりと抱きしめていたが、見ると死んでいる子供である。これほど母の強さと愛を感じたことはなかつた。この悲惨な出来事は言葉では表しようはなく、またそれ以上のことが数知れなかつたのである。

負け戦の惨めさは……涙涙だ、戦争は決してやつてはいけないと思う。このような思いは私たちだけで終つてほしいと願う毎日である。

そして、私たちが乗せられた荷車内には内側に板で二段ベットがつくつてあり、この中に三十一、四十人を詰め込んだ。そして、ソ連軍将校が「これで東京ダモイ」だと言つた。その言葉を信じてみんな喜んだが、それは真つ赤なうそであつた。汽車は雪原を北へ西へと走り続け、東へ行く気配は全くなかつた。途中何回か機関車の燃料や水を補給するため停車する。その都度黒パンが支給されたが、少量で寝ているだけでも腹

が空く。五、六回と停車したころだったと思うが、各車両から寒さのためか何人かの死亡者が出た。

ソ連兵が来て死体を下車させたが、この同志たちはその後どうなったのだろうか。それから同じように走ってはとまり、とまっては走る。もうきょうは幾日目かも忘れてしまう。このころから皆空腹を覚え始めたのだ。そうして鞍山を出発して三十五日間の汽車の旅は終わりとなり、ウズベク共和国の首都タシケントの南にあるアングレンに到着した。狭苦しい箱詰めのような生活からは解放されたのだが……。ここは石炭の町で私たちが着いたときには、このアングレン盆地の中央を流れていた川を東側の山裾に先着の同志の手で切り替えが終ろうとしていた。その新しい川の東側の丘にあるラーゲル（収容所）に入れられたのである。

東京ダモイがこのありさまでソ連のうそには腹が立つたが、どうにもならず彼らのなすがままである。

この積雪のラーゲルで皆と「こんなところに来た以上は犬死せず故国の土を踏むまで頑張ろう」と誓い合つたものだ。

こうしてこの炭坑の町でのラーゲル生活が始まったのだが、その一日一日がお話にならない苦しい毎日となつてしまった。

ラーゲル内にはドイツ兵が一幕舎に入っていた。彼らは作業が終わるとグループでギターを弾き、歌うという毎日である。私たちとは全く違う。寂しさ情けなさをこうして紛らわしているようだ。空腹などの苦しさは私たちと変わらないだろうに……。武士は食わねど高楊枝である。

これは日本の語句であるが……。日本人は食べ物に釣られたり、甘い言葉に負けてソ連の言うとおりに行動を変えるが、彼らは自分たちの信ずる道しか行動しない。そのためいろいろと圧力はあるのだが負けない人たちだった。最低生活に入るとその人の真価がわかるという。彼らの毎日を見て私はドイツ人こそ世界最高の人種であると思った。彼らはこんなことも言った「あなたたちには大和魂があり、私たちにはナチス魂がある、どうしてあなたたちはソ連の言いなりになるのですか」と言われたときに私は恥ずかしくて穴がある

つたら入りたい気持ちだった。

そして二、三か月の苦しい生活が続いたある日、私たち十数人が使役に出された。アメリカ製のトラックに乗せられて北へ走ること一、二時間、その途中で声をかける日本人が約十数人いた、私たちの車を見ると彼らは手を振り大声で「おれたちは石川県だ……一個中隊いるから帰ったら頼むぞ……」と何人かが叫んだ。その場はお互いに手を振って別れてしまったが、彼らはノモンハンの戦闘で拉致された部隊の人たちであることが後日わかった。そうするともう十年もの歳月を強制労働させられていることになるのである。

ラーゲル生活が半年くらい過ぎたころ東方にそびえる天山山脈を越えるといつて数人が逃げたが、聞くところによるともちろん銃殺されたとのことだ。

このころから同志の中に民主グループと稱する分子が出始めた。その者たちがソ連側に進言したため私たちのグループは反動主義者だということ超重労働の炭坑のラーゲルに移されることになってしまった。ラーゲルを出るときの検査で所持品はほとんどソ連兵に

取り上げられてしまった。反発もできず悔しい思いをした。

取り上げられたものは時計、万年筆、石けんや下着等で、これで丸裸同然となってしまったのである。これからの生活を思うと涙が流れてとまらない。

新ラーゲルは盆地の西側の丘の上にあった。ここは炭坑関係の仕事ばかりである。その初めは切り替えられた川底のかたい砂利を取り除くため一メートル四方くらいの穴を二メートルの深さまでに掘って、ダイナマイトを埋め込み爆破する。緩んだ砂利を荷車で運び出すのである。

決められた穴掘りが完了するとノルマー○○%というのだが、これが大変な仕事である。柄のグラグラするツルハシ、同じような円ピとバケツだけだ。日本では考えられない道具である。ツルハシは一日使うと焼きが入っていないまくら仕上げのため先がすぐ曲がって使いものにならない。道具といえるものではない。穴を掘って六、七割進んだところで大きな石に突き当たることがたびたびある。そうなるときもうもまただ

めだどがつかりする。パンの量が少なくなるためである。体力の衰えもあり一〇〇%など到底もらえるものではない。作業量に対して与えられるものは一食のパンの大小である。その一〇〇%のパンとは今日本にある四角の食パンを厚さ約五センチくらいに切ったものを半分にした大きさと考えればよい、もちろん酸っぱいような黒パンである。これが二、三十代の若者の一食分である。

その作業量はよいときでも七〇%で、パンも従って三、四センチの厚さとなる。働かざる者食うべからずである。空腹の度は日を追って深刻化していく。もちろん栄養はとれるはずがないのだから、このころから栄養失調が始め死亡者が続出してきた。

警戒している歩哨が「あと一か月で東京ダモイ」と言った。うそとは思っても皆の顔にはちよつと笑みが浮かんだが、今度もうそであった。

穴掘り作業に出ると交代で野草、カエル、蛇等をと、使役に出た人たちに分けてもらった岩塩を入れて煮る。これをみんなでむさぼり食う。これも私たちに

は大切なことである。そのためとも思えないが、下痢をする者が多く便をみると黒緑色である。これでいつまで生きられるのかと心細くなってくる。

そして悲劇が起きた。下痢をしているので何回となく便所に行きたくなるため、作業中でも野糞をする。この日、隣の作業グループで銃殺が起きた。それは作業をしている私たちの周囲を四角に歩哨が警戒している。この歩哨と歩哨を結ぶ線から一メートルでも出ると大変だ。一発の銃声が聞こえた。隣のグループの同志が便をする姿のまま銃殺されたのだ。逃亡したという理由のようだ。こうしていとも簡単に処理されてしまう。逃亡している姿勢がどうかよく見ると言いたい。馬鹿らしくて話にもならない。今の私たちの体で逃亡できるかどうか考えてみるととなりたくなつた。

奴隷どころではない。皆で口惜し泣きをしたがどうにもならない。この事件があつて作業もできず、この日は六〇%しかもらえなかった。またパンが小さくなつてしまった。泣き面にハチである。その後も同じよ

うな事件がこの露天掘りで起きている。

二、三か月後私たちは地下炭坑に入ることになった。そのころ露天掘りの作業グループから次々と死亡する者が出てきた。原因は毒野草を食ったため目が見えなくなり、下痢をした末死亡してしまう。また栄養失調で寝たままの姿で朝には冷たくなっている、そして銃殺された者などである。私の横に寝ていた東京の加藤上等兵が、朝作業に出る時間なのに起きない、呼んでも返事がない、ゆり起こそうとしたら冷たくなっていく。栄養失調で死んだのである。どうしようとうろウロしていたらソ連兵がきて「ダワイダワイラボータ」と言つて強引に外に出されてしまった。母一人子一人の加藤上等兵だった。残念で死んでも死にきれない気持ちだったと思うと、涙がとまらなかった。昨夜も枕を並べて語り合つたばかりだったのに……その日は一日中ぼうつとして作業にはならなかった。作業を終えて帰ってきたら、遺体はラーゲルの西側の墓地に埋葬したと聞いたが、供養をしてやることもできず、終わつた。情けないことだと思つた。

それからまた悲劇が起きた。

このころ支給されているエン麦のスープのため腸閉塞を起こして入院し死亡した者が続出した。それはエン麦といつても精麦されたものではなく、外皮のままとテンサイ（砂糖大根）のスープである。麦の外皮で舟のような多量の殻が腸内で大きな玉になって詰まってしまったとのことである。空腹のためガブガブとそのまま飲み込んでしまった結果のようだ。半年くらいして支給されなくなった。ソ連は私たちを人間として扱つてはいないのである。

ラーゲルでの朝はコップ一杯の水で塩（岩塩）で歯を磨き顔を洗うという毎日だが、現在の人たちには想像もできないことだと思ふ。

三十人の兵士とともに過ごしてきたこのアングレンの地で何回となく作業や給食のこと、そしてソ連兵の私用のことで言葉の不備から気持ちが悪く通ぜず「捕虜のくせに」とのしられマンドリン（機関銃のこと）を胸に突きつけられたが、そのたびに今度はだめかと情けなくなる。歩哨兵の言うがままだ。一つ間違えれば

胸に穴が開いてしまう。そのときの気持ちは……目を閉じて神に祈るのみだった。

思えばよくぞ生きて帰れたものだと思う。その他にも苦しみや恐ろしいことはたくさんあるが、今話せば笑い話になることも多い。

ラーゲルの中で「つるし上げ」がこのころから頻繁に行われるようになった。実に情けないことだと思う。十数人の民主グループという者（日本人同志）がソ連の後押しで共産主義の教育と稱して時折集会を行う。休みもなく重労働を終えてラーゲルに帰れば早く体を休めたいのが人情である。寝る前に寸時の語り合いや将棋をして心を休めるのだ。そして板張りのベットに横になると南京虫の猛攻を受けて眠れぬ夜が多い。この虫と同じような人間どもである。そんな苦勞などお構いなしだ。彼らはソ連側にへつらっているので、労働はなく腹いっぱい食って体力もあり元気がよい、二回、三回と集会に出ないと反動主義者であるといつて、広場の台上へ引きずり上げられて、四方からあることないことを口きたなく長い間のしる。これが「つる

し上げ」ということだ。私たちには大変迷惑なことであつた。

前記のドイツ兵がこれを見たら大笑いすることだろう。食物に釣られて同志を教育という名のもとに痛めつける等日本人の悪いところのようだ。自分さへよければ他人の苦痛などなんとも思わないのだ。今私はこの異国の地で栄養失調寸前での体で重労働をしているのだから、その苦痛を思えば同志を痛めつけるなどできるものではないはずである。馬鹿者ども……とどなる。そして月日が流れようやくグモイの日がきて故国に向かう途中のことである。ソ連領内での前記のような苦痛を耐え忍んできた気持ちが爆発して、日本海航行中のあの引揚船上での恐ろしい出来事となつてしまつたのである。